

狩野先生の思い出

小山 昭雄

私が学習院大学へ来てから間もなく東1号館の法経研究棟が建てられた。それまでの研究室は木造の北別館の一室であったが、東1号館へ移転することになったときに、希望する研究室の選択を私が最初にするようになった。あとで聞いたところでは、そのときの各先生の研究室のなかで、私の部屋が一番条件の悪い部屋であることを皆さんが認めておられたからだという。お言葉に甘えて“最上階の南側の真中”を希望し、904号室をいただいた。そのとき隣の905号室に来られたのが狩野先生であった。以来およそ20年間にわたって、狩野先生とは、同じ経営学科の同僚ということに加えて、隣人として親しくお付き合いをいただくことになった。それまでは、専門分野が違っていることや、お互いの研究室のある建物が別であったことから、個人的にお話をする機会はほとんどなかったが、隣人になってからは言葉を交わす機会は自然に増え、話の内容は学問的なことよりも、学生の問題やお互いの日常生活にかかわることが多かったように思う。その頃私は古くなった自宅を建て替えることを考えていた。その話が出たときに、狩野先生のお宅も新築されて間もないことをお聞きした。話がどのように進んだかは忘れてしまったけれども、とにかく、新築した家を見に来ないか、というお誘いをうけ、武蔵小山のお宅を訪問した。台所、書斎を含めてほとんどすべての部屋を見せていただき、さらに、家を建てるときに留意すべき事項についてもいろいろと教えていただいた。そのときであったと思うが、地元の商店街の人たちからも相談役として頼りにされておられたようで、いろいろな問題をもってこられるのでたいへんだよ、といて笑っておられたのを記憶している。

お互いの年令の近いこともあって、私にとっては、気楽に話のできる先生であった。

個人的には気楽におつきあいできる先生であったが、公の場では、信念を曲げない辛口の発言もしばしばされていた。私が経営学科の学科主任をしているときに、高等科からの進学に関連して問題が発生し、学長を含めて男女高等科の先生方と話し合う機会をもったことがあった。そのときに先生が述べられた強い発言を今でもはっきりとおぼえている。その後、私が教務部長や大学院研究科委員長をしていたときも、折にふれて先生から辛口の御意見をいただき、なるほどと思ったことも何回かある。不得手な役職を命ぜられたとき、先生は、気楽に相談のできるよきアドバイザーであった。

1992年の秋から1年間、英国で勉強する機会を与えられたときは、“この年令になってよく行く気になったね。体に気をつけて楽しんでいっちゃい”といったはげましの言葉をいただいたのだが、帰国して1年ぶりにお目にかかったとき、先生の変りようにはびっくりした。日頃から健康には自信をもっておられ、医者にかかったことがないと自慢しておられた先生であったのに、何となく弱気の言葉ばかり口にされるのには意外の思いがした。でも、折々の会議の席ではしばしば先生らしい発言をされていたので、この様子だと元気になれる日も近いのではないかと期待していたのだが、その期待も空しくなってしまった。こうして思い出を書いている間も“ちょっとお邪魔していいかな”といいながらひょっこりと研究室へ入ってこられて、コーヒーを飲みながら、それとない雑談をかわしていたときの先生のお姿が脳裏に鮮明に浮かびあがってくる。その先生とおしゃべりする機会は、もはや、なくなってしまった。今となっては、ただ、御冥福を祈るのみである。